

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	唐代小説に見られる「紙銭」
Author(s)	許, 飛
Citation	中國中世文學研究 , 57 : 40 - 62
Issue Date	2010-03-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051420">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051420</a>
Right	
Relation	



# 唐代小説に見られる「紙銭」

許 飛

はじめに

唐代の小説を読むと、紙銭という言葉をよく目にする。紙銭は紙で造った冥界用のお金である。それはいつ、どのような背景で誕生したのか、小説においてどういう役割を果たしているのか。

紙銭に関する論考として、日本では、伊藤富雄氏の「紙銭習俗考」<sup>(1)</sup>がある。中国では、黄石の「紙銭考略」<sup>(2)</sup>と陳啓新の「冥銭史考」<sup>(3)</sup>、陸錫興の「吐魯番古墓紙明器研究」<sup>(4)</sup>などが挙げられる。研究は重ねられているが、まだ十分な点もいくつかある。紙銭は、昔死者のために墓に埋めた銅銭つまり「瘞銭」に由来するという説がある。黄石氏はその説に賛成し、紙銭が伝統的な冥界の思想の産物だと指摘するが、当時の人の冥界のお金についてどう考えていたかなど、具体的な証拠は挙げられていない。紙銭に変わった理由として、銅銭を埋めた結果、盗掘を

引き起こしてしまっただともいうが、葬儀の改革との関係が不明白である。また、宋代には、紙銭が仏教の影響で発生したという説もある。伊藤富雄氏と陸錫興氏はそれに賛成するが、証拠はあげられていない。更に紙銭が小説にどういう影響を与えたのかということについては、まだ考察されていない。

本論では、仏・道の經典・小説などや新しい発掘情報をもとにして、紙銭の由来について、仏・道二教の影響を検討し、また紙銭が唐代小説に与えた影響についても考察してみたい。

## 一 唐代に見られる紙銭の資料

紙銭が文献に登場するのは唐の時代である。以下にそれを列挙しておく。

（二）表Ⅱ・小説

番号	出典	作者	成書年代	広記の巻・部	篇名	内容
番号	出典・巻数	作者	作者の年代	題目	巫	原文
1	王梵志詩集2	王梵志	初唐	得錢自喫用		空得紙錢送
2	王梵志詩集2	王梵志	初唐	愚人痴涇涇		死得紙錢送
3	王梵志詩集2	王梵志	初唐	有錢惜不喫		只得紙錢送
4	全唐詩298	王建	766?~?	寒食行		三日無火燒紙錢
5	全唐詩382	張籍	767?~?	北邙行		寒食家家送紙錢
6	全唐詩386	張籍	768?~?	華山廟	巫女	手把紙錢迎過客
7	全唐詩393	李賀	790~816	神弦	巫女	紙錢窸窣鳴颼風
8	全唐詩427	白居易	772~846	黑潭竜	巫	紙錢動兮錦傘搖
9	全唐詩429	白居易	772~846	遊悟真寺詩		紫傘白紙錢
10	全唐詩435	白居易	772~846	寒食野望吟		風吹曠野紙錢飛
11	全唐詩437	白居易	772~846	答謝家最小偏 憐女		枉向秋風吹紙錢
12	全唐詩474	徐凝	中唐	嘉興寒食		無人送與紙錢來
13	全唐詩548	薛逢	晚唐	君不見		一把紙錢風樹杪
14	全唐詩643 <small>(5)</small>	李山甫	晚唐	項羽廟		可要行人贈紙錢
15	全唐詩643 <small>(5)</small>	李山甫	晚唐	雨後過華岳廟		牆外素錢飄似雪
16	全唐詩21	王叡	晚唐	送神		紙錢灰出木綿花
17	全唐詩684	吳融	?~903	野廟	女巫	野風吹起紙錢灰
18	全唐詩739	李建勛	873?~952	迎神		陰風窸窣吹紙錢

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
通幽錄	通幽記	通幽記※	靈異集	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	廣異記	紀聞	杜鵬拳伝	玄門靈妙記	法苑珠林73	冥報記下	冥報記	冥報記中		
陳劭	陳劭	陳劭	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	戴孚	牛肅	蕭時和		道世	唐臨	唐臨	唐臨		
793820	793820	793820	789前	789前	789前	789前	789前	789前	789前	789前	789前	789前	789前	789前	789前	787前	779前		668	650655	650655	650655		
340鬼25	379再生5	332鬼17	330鬼15	280夢5	334鬼19	382再生8	336鬼21	112報応11	379再生5	334鬼19	379再生5	330鬼15	381再生7	329鬼14	447狐1	100釈証2	300神10	71道術1	382再生8	380再生6	132報応31	109再生8		
盧頊	王掄	唐暄	王鑑	閻陟	岐州佐史	周頌	宇文觀	張御史	費子玉	韋栗	崔明達	楊元英	裴齡	楊瑒	僧服礼	李思元	杜鵬拳	寶玄德	齊士望	王璿	李知礼	李山竜		
畢而去	已見婦人背上負錢焚	即取紙剪爲錢財	錢財奴婢無不得也	多剪紙人奴婢ノ乃知	皆紙錢枯骨之類	果有百千紙錢也	當奉萬張紙錢	紙錢五千貫理易辦	地府所用是人間紙錢	求二百千紙錢	用我銅錢今還紙錢	今成紙錢	要紙錢千貫	市人皆得紙錢	金錢者是世間黃紙錢	可以三十張紙作錢	悉是冢墓之間紙錢爾	令焚五千張紙錢	今於此用紙錢	仍買好白紙作錢	尋乃造紙錢等待焉	不用銅錢欲得白紙錢	紙錢絹及飯饌爲奠禮	以紙錢束帛并酒食

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24				
三水小牘※	宣室志	宣室志	纂異錄	異聞錄	酉陽雜俎※	酉陽雜俎	博異記 <sup>(19)</sup>	博異志	原化記	河東記	河東記	河東記	河東記	河東記	續玄怪錄※	集異記	集異記	渚宮旧事				
皇甫枚	張說	張說	李玟	李玟	段成式	段成式	鄭還古	鄭還古	皇甫氏	薛漁思	薛漁思	薛漁思	薛漁思	薛漁思	李復言	薛用弱	薛用弱	余知古				
910	860	860	855前	854前	853	853	845	845	841前後	836	836	836	836	836	827	824	824					
123報応22	351鬼36	304神14	350鬼35	328鬼13	343鬼28	341鬼26	380再生6	122報応21	416草木11	385再生11	384再生10	310神20	340鬼25	306神16	341鬼26	347鬼32	308神18	217卜筮2				
王表	王坤	淮南軍卒	許生	漕店人	李和子	鄭瓊羅	鄭潔	馬奉忠	京洛士人	辛察	許琛	王錡	韓弇	盧佩	李俊	李佐文	劉元迴	王栖霞				
厚賂爾陰錢	女巫送至門焚紙錢	探衣中皆紙錢耳	開櫃視皆紙錢也	更多與紙錢	備酬焚之	君辦錢四十萬	於道	令具酒脯紙錢乘昏焚	紙錢三五張	乃設酒饌紙錢萬貫	取紙數張割爲錢	紙錢燒訖皆化爲銅錢	好紙燒之	切要五萬張紙錢望求	可致紙錢萬張	卷紙錢及酒食皆飛去	變爲銅錢	收拾紙錢載於馬上即	陰錢三萬貫	攜酒一壺紙錢副焉	及紙錢綾帛數十車	栖霞顧百錢乃紙也

43	稽神録	除鉉	9	3	5	9	5	5	清源都將	負紙錢自門而入
44	玉堂閑話※	王仁裕	9	4	7	9	5	3	袁繼謙	以其刺兼冥錢焚之
45	玉堂閑話※	王仁裕	6	?	4	7	5	1	許生	所求者楮貨也君還魂後可致而焚之
46	玉堂閑話	王仁裕	6	?	4	7	5	3	謝彥璋	其錢皆紙矣
47	北夢瑣言※	孫光憲	9	6	4	7	5	1	楊収	非銅錢也燒時幸勿著地
48	北夢瑣言	孫光憲	9	6	8	前	4	0	南岳真君	上仙何以須紙錢
49	伝異記		3	4	8	3	3	4	李全質	並紙錢佩帶、焚之
50	投荒雜録		4	8	3	4	4	3	南中僧	以紙爲圓錢

## 二 紙錢の由来

### （一）発生時期

#### 1. 従来の説

紙錢の発生を論じる最も早い書物は、唐・封演（726〜約790）の『封氏聞見記』である。その巻六「紙錢」に「紙乃後漢蔡倫所造、其紙錢魏晉以來始有其事。今自王公逮於匹庶通行之矣。」（紙は乃ち後漢の蔡倫の造る所にして、其の紙錢は魏晉以來始めて其の事有り。今王公自ら匹庶に逮ぶまで之を通行するなり。）とある。

また、『新唐書』巻一百九の「王璵伝」（『旧唐書』巻一三〇もほぼ同じ）に「漢以來葬喪皆有瘞錢、後世里俗

稍以紙寓錢爲鬼事。至是璵乃用之。」（漢以來葬喪皆瘞錢有り、後世の里俗に稍く紙を以て錢に寓して鬼事と爲す。是に至り璵乃ち之を用ふ。）とある。それを受けて南宋・朱熹（1130〜1200）などが、紙錢は王璵によつて利用され始めたと指摘し、『朱子語類』巻一百三十八「雜類」には、「紙錢起於玄宗時王璵。」（紙錢玄宗の時の王璵より起る。）という。

別に、南宋・戴埴の『鼠璞』巻上「寓錢」には「『法苑珠林』載、紙錢起於殷長史。」（『法苑珠林』に載す、紙錢殷長史より起る。）とある。

また、南宋・葉釐『愛日齋叢抄』巻五には「予觀洪慶善『杜詩辨証』載『文宗備問』云、南齊廢帝東昏侯好

鬼神の術、剪紙爲錢以代束帛。至唐盛行其事、云有益幽冥。」(予洪慶善の『杜詩辨証』を觀るに、『文宗備問』を載せて云ふ、「南齊の廢帝東昏侯鬼神の術を好み、紙を剪りて錢と爲して以て束帛に代ふ。唐に至りて盛んに其の事を行ひ、幽冥に益有りと云ふ」と。)とある。

更に、清・徐乾学は『說礼通考』卷九十六「紙錢」で、前人の論述を列挙して、「其禱神而用紙錢、則起自殷長史、盛行於李淳風・王瓊也。」(其の神を禱りて紙錢を用ふるは、則ち殷長史より起り、李淳風・王瓊に盛行せらるるなり。)と指摘する。

しかし、現行の『法苑珠林』に殷長史が紙錢を使ったという記録はなく、東晋から隋までの殷長史と稱する十二人に関して紙錢に関わっていたという記載はない。また、東昏侯が紙錢と関係していたという記述もない。つまり、魏晋時代から唐までの文献には紙錢に関する記述は見あたらず、紙錢が文献に登場するのは唐代からである。

黄石氏は「紙錢考略」で、朱熹の説を否定して、「我們断定紙錢發生于魏晋六朝之間、大致是沒什么錯誤的。」(我々が紙錢は魏晋六朝の間に発生したと断定したのは、おおよね間違いないだろう。)と述べるが、その根拠は不明である。

## 2、発掘情報

新疆吐魯番で墓誌に「和平元年辛未」(551年)と記している墓から、蓮の花のような形の切り紙が発見さ

れた。<sup>(11)</sup>晋から南北朝中期(三世紀〜六世紀初)にかけての墓では紙の靴が発見され、盛唐と中唐(七世紀後半〜八世紀前半)の墓から、紙錢・紙人・紙靴など紙の明器も発見された。<sup>(12)</sup>北朝後期から唐の初めまで、新疆吐魯番地区には漢民族を主体とする高昌王国(502〜640)が存在していた。『北史』卷九十七「高昌伝」に「其刑法・風俗・昏姻・喪葬華夏と小異なるも大ね同じ。」とある。これらから、陸錫興は「吐魯番古墓紙明器研究」で、紙錢の登場が初唐から始まったと述べている。

## 3、紙の明器

明器とは冥界で生活する死者のために埋葬した、実物の形に似せて作ったものである。紙錢も明器の一つである。六朝にも紙で作った明器に関する記述がある。それは南朝宋・劉敬叔『異苑』の「謝晦」<sup>(13)</sup>に出てくる紙の皿である。

謝晦在荊州。壁角間有一赤鬼、長可三尺。来至其前、手擎銅盤、滿中是血。晦得、乃紙盤。須臾而没。  
(謝晦荊州に在り。壁角の間に一赤鬼有り、長三尺可り。来たりて其の前に至り、手に銅盤を擎げ、中に滿つるは是れ血なり。晦得れば、乃ち紙盤なり。須臾にして没す。)

この話では、幽鬼が持っている時は、銅の皿であるが、

謝晦が手にすると、紙の皿に変わったという。六朝の時代の小説は、創作の意図を持たずに、事実を記録した史書に類するものと考えられていた。<sup>(14)</sup>紙の皿はその時代に使われていた物であろう。

## (二) 発生理由

### 1、従来の説

紙銭の由来について、封演は『封氏聞見記』に「古者享祀鬼神有圭璧幣帛、事畢則埋之。後代既實錢貨、遂以錢送死。『漢書』稱、『盜發孝文園瘞錢』是也。率易從簡更用紙錢。……凡鬼神之物、取其象似。亦猶塗車芻靈之類。」(古は鬼神を享祀するに圭璧幣帛有り、事畢れば則ち之を埋む。後代は既に錢貨を宝とし、遂に錢を以て死を送る。『漢書』に稱す、「孝文の園の瘞錢を盜發す」とは是れなり。易きに率<sup>したが</sup>ひて簡に従ひて更めて紙錢を用ふ。……凡そ鬼神の物、其の象を取りて似せる。亦猶ほ塗車芻靈の類のごとし。)という。「圭璧」は玉、「幣帛」は絹、いずれも贈り物に使う宝物である。「塗車」は、泥で作った車、「芻靈」は草で作った人形、死者とともに埋める明器である。封演は、漢代の葬儀に用いる瘞錢は鬼神の祭祀に用いる玉・幣と同じであり、紙錢は瘞錢のかわりで、簡単に手に入れやすいものを用いるという明器の発想が紙錢を使う理由だという。封演の説はほぼ定説になり、後の紙錢に関する文章によく引用されている。

そして、黄石氏は「紙錢考略」で玉幣から紙錢に変わ

った原因を、①鬼神に送る品物が実物から明器に変化した、②瘞錢が墓の盜掘を引き起こした、③紙錢が手に入れやすい、の三点にまとめている。

また、紙錢が仏教・道教とかかわっているという説もある。<sup>(15)</sup>以下、紙錢発生の理由について、仏・道二教との関係を含めて検討してみたい。

### 2、冥界にお金が必要だという考え

陝西省に前漢の景帝の陽陵がある。その墓は、衣食住をはじめ、生活や生産や政治に関わるものが揃えられ、まるで現世の生活を再現したものである。なぜそんなものが必要だったのか。それは死者が冥界で生前とあまり変わらない生活を送るという考えがあったからである。現世に必要なものは冥界にも必要だと想定され、それを死者のために墓に埋めた。お金は生活に必要なものの一つであるから、当然冥界でも必要である。

西晋・魯褒「錢神論」に「諺云……有錢可使鬼。而況于人乎。」(諺に云ふ……：錢有れば鬼を使ふべし。而るに況んや人に于けるをや。)とある。お金があれば幽鬼まで使役できるということから、お金は冥界でも通用していたことが伺われる。

梁・王琰(約451?)『冥祥記』「袁炳」<sup>(17)</sup>に、南朝・宋のとき、県令の袁炳がなくなつたあと数年、友人の夢に現れ、離別以来の生活を話した。その中で、金錢について「吾等平生立意着論、常言、生爲馳役、死爲休息。今日始知定不然矣。恒患在世爲人務馳求金幣、共相



贈遺。幽途此事亦復如之。」(吾等平生に意を立て論を著し、常に言ふ、生を馳役と爲し、死を休息と爲すと。今日始めて定めて然らざるを知る。恒に世に在りて人の爲に務めて金幣を馳求し、共に相ひ贈遺するを患ふ。幽途も此の事亦復た之の如し。)と言っている。この話からも冥界で現世と同じようにお金が必要であったことが伺われる。

### 3、偽物の「冥錢」

死者が冥界で生活するのに必要なものを埋葬しなければならぬが、全てのを埋めるのは、現実的に不可能である。そこで一部は実物に似せた明器を使うようになった。秦始皇帝陵の兵馬俑や銅車馬などはその例である。『札記』「檀弓下」に「塗車芻靈、自古有之。明器之道也。」(塗車芻靈、古自り之有り。明器の道なり。)とある。また、明器が殷周時代にすでに盛んに行われたことは、発掘によって検証されている。

発掘情報によると、銅錢に似せたものも存在している。その材料は泥・土器・骨・金属など様々である。例を二つあげておく。1981年安徽省長豊県にある戦国晩期の楚墓から、土器の鍍金版が発見された。1991年西漢景帝の陽陵からは金属の半両「冥錢」が出土した。それは実物の錢と模様が同じだが、薄くてサイズも小さく、数十名の陶俑の腰に巻き付けられていた。

ところが、紙錢は燃やす場合もある。『読礼通考』でも紙錢は神を祭祀する時に使うと記されていた。つまり、

紙錢は単に「瘞錢」の代用だけではなく、祭祀の際の供え物としての役割も果たしている。「瘞錢」の代用の場合は、もちろん死者とともに埋めた。新疆吐魯番の唐墓から紙錢が発掘されたし、また宋・元・明の墓から紙錢が発掘された情報もある。紙錢を燃やすのは、鬼神の祭祀かたと関係があると思われるので、第三節で詳しく論じる。

### 4、魏晉時代葬儀の改革

黄石の論文では、「瘞錢」が漢末に墓の盜掘を引き起こしたことが紙錢の発生と関係あると指摘している。しかし、それだけではなく、漢末の一つの大きな社会改革、つまり曹操による葬儀の改革とも関係していると考えられる。

漢代から、儒家の思想は国家の教学として認定され、次第に社会の主たる思想になった。儒教の教えでは、親孝行がもつとも重視される。親が生きているときはもちろん、なくなつた後も重要である。『札記』「中庸」に「敬其所尊、愛其所親。事死如事生、事亡如事存。孝之至也。」(其の尊ぶ所を敬し、其の親しむ所を愛す。死に事ふること生に事ふるが如く、亡に事ふること存に事ふるが如くするは、孝の至りなり。)と記されている。それは、立派な墓を造り、墓の中にたくさんものを埋める所謂厚葬につながつた。厚葬は、資金を必要としたし、盜掘の多発も引き起こした。戦乱が続いた漢末では、墓の盜掘が財産を得る手段とされ、曹操も行っている。

ところが、後にその曹操が葬儀の改革を行う。

『宋書』卷十五「礼志二」に「漢以後、天下送死者靡、多作石室石獸碑銘等物。建安十年、魏武帝以天下雕弊、下令不得厚葬。」（漢以後、天下死を送ること奢靡にして、多く石室石獸碑銘等の物を作る。建安十年、魏の武帝 天下の雕弊するを以て、令を下して厚葬するを得ざらしむ。）とある。曹操はなくなる前に、遺令を下し、

「天下尚未安定、未得遵古也。葬畢、皆除服。其將兵屯戍者、皆不得離屯部。有司各率乃職。斂以時服、無藏金玉珍寶。」（天下尚ほ未だ安定せず、未だ古に遵ふを得ざるなり。葬り畢れば、皆服を除去。其の兵を將みて屯戍する者は、皆屯部を離るるを得ず。有司各おの乃の職に率へ。斂むるに時服を以てし、金玉珍寶を蔵すること無かれ。）と命じている。

質素な葬儀を行うことは、曹操の後も続く。その子の曹丕も葬儀について「終制」<sup>(23)</sup>を作り、「……無施葦炭。無藏金銀銅鐵。一以瓦器、合古塗車芻靈之義。」（……葦炭を施す無かれ。金銀銅鐵を蔵する無かれ。一に瓦器を以てし、古の塗車芻靈の義に合はせよ。）という。瓦器とは土器である。曹丕はその墓に埋めるものを実物の代わりにいっさい土器にさせた。

晋の時代にも、引き続き「薄葬」を行っていた<sup>(24)</sup>。曹操が厚葬を禁止したのは、自分の墓もいつか盗掘されると恐れたからかもしれない<sup>(25)</sup>。しかし、彼の命令によつて、薄葬に変わった。その結果、墓に埋めるものの量

が少なくなり、埋めるものの質も変わった。紙は最初決して手に入れやすいものではなかったが、その後普及していった。柔らかく加工しやすい紙が、手に入れやすくなると、明器の材料としては適したものになる。そして謝晦の話に出た「紙盤」のような紙の明器が登場した。紙の明器はまた紙銭の登場につながったと考えられる。

#### 5、紙銭の製造者について

紙銭について民間の説話を分析した論文がある。陳華文・羅曉氏の「形式変化与觀念守恒——焼紙銭由来伝説与民間文学変異性問題」<sup>(26)</sup>である。彼らは各地から収集した民間説話十一話を分析した結果、次のようなプロットがあることを指摘している。

①製造者が質が悪くて紙がなかなか売れないので困る。②製造者と関係者が解決策を謀る。③まず一人が突然死ぬことを装う。④関係者は銭の形に剪った紙を燃やす。⑤まもなく死者が生き返って、燃やしてくれた紙は冥界でお金になり、閻羅王に賄賂を送ることができて助かったと話す。⑥その場にいた親戚や隣人によつて話が広がり、紙銭を燃やして死者におくるようになる。

質がよくない紙で紙銭を作る話は小説にも見える。

『冥報記』「王璿」（資料Ⅱ・3番）に次のような話がある。

王璿という役人は冥界で訴えられて、冥土の使者に連れられ、審判を受けた。審判官は官員と僧侶二

人であった。調べてみたら、王璣の無実がわかり、現世に戻ることを許した。裁判所で元の上官に会った。その人は生前に仏教を信じなくて、刑罰を受けたり、飢餓に苦しんだり、ひどい目にあっていた。彼は自分の親族に功德をなすように伝えて欲しいと王璣に頼んだ。王璣は帰ろうとしたが、暗くてなかなか道がわからなかった。使者が賄賂を条件として、帰る道を教えた。使者の求めたものは一千の銭であり、それは銅銭ではなく、紙銭だった。王璣は生き返ったが、紙銭を送るのを忘れた。約束の時間が過ぎると、王璣は気絶し、使者が怒って捕まえに来たのを見た。何度も許しを乞い、紙銭を作って焼いて送らせた。翌日、冥土の使者が来て、送った紙銭の質がよくないと言った。そこで、王璣は質のいい白い紙で作り直して送ると、その後は何ごともなかった。(要約)

また、『河東記』「許琛」(表Ⅱ・31番)にも、殺された武元衡の幽鬼が、紙銭で彼を祭った王潜在伝えた言葉に、

深愧每惠錢物、然皆碎惡、不堪行用。今此有事、切要五萬張紙錢。望求好紙燒之。」(深く毎に錢物を恵まるを愧づるも、然れども皆碎惡にして、行用に堪へず。今此に事有り、切に五万張の紙銭を要す。

好紙を求めて之を焼かんことを望む。)

とあり、質のよい紙銭を求めていたことがわかる。

安い紙銭から質のよい高い紙銭に変わっていくのは、製紙業の成長と関係していると思われる。紙銭の利用が始まると、最も益を得たのは紙の製造者である。なぜなら、葬儀と祭祀に使う紙銭の使用量は次第に多くなっていくからである。『封氏聞見記』に「今代送葬爲鑿紙錢。積錢爲山、盛加雕飾、昇以引柩。」(今代送葬するに紙銭を鑿つを爲す。銭を積みて山と爲し、盛んに雕飾を加へ、昇ぎて以て柩を引く。)とある。また、明の宋応星『天工開物』に「盛唐時、鬼神事繁、以紙錢代焚帛。…故造此者名曰火紙。荆楚近俗、有一焚修至千斤者。此紙十七供冥燒、十三供日用。」(盛唐の時、鬼神の事繁く、紙銭を以て帛を焚くに代ふ。…故に此を造る者名づけて火紙と曰ふ。荆楚の近俗に、一たび焚くに侈にして千斤に至る者有り。此の紙の十の七は冥焼に供へ、十の三は日用に供ふ。)とあり、紙銭の使用量の多かったことが伺われる。製紙業者にとって、紙銭の拡大は利益を得るのに好都合であり、自分が製造した紙を宣伝することにもつながった。彼らは紙銭の流行に大きくかかわっていたと考えられる。

### 三 仏・道二教との関わり

紙銭は紙の製造者の商売だけでは広まらない。それは

単なる日用品ではなく、大事な祖先に供するものだからである。葬儀と祭祀の際には、何を、どのように供えるのか、それを取り仕切る人物の影響力は否定できない。葬儀と祭祀に力を持つ人物と言えば、巫女と道士と僧侶である。彼らは人の願いを鬼神に報告したり、鬼神の意志を人に通達したりする役を果たす。彼らの口から鬼神の意志を通達してくれば、人々は従うしかないだろう。紙銭が鬼神へ送るものである以上、彼らとの関わりは避けられないだろう。以下、その関連を検討してみよう。

### （一）、仏教

仏教が紙銭と関わっていると認識されたのは南宋の時である。袁褰の『楓窓小牘』巻下に、宋の高宗の葬礼の際、大臣が宋の孝宗を諫める言葉を書き記している。「俗用紙銭、乃釋氏使人以過度其親者、恐非聖主所宜以奉寘天也。」（俗に紙銭を用ふるは、乃ち釈氏の人をして以て其の親を過度せしむる者なり、恐らくは聖主の宜しく以て寘天を奉ずべき所に非らざるなり。）とある。「過度」は仏教用語で、救うの意味であり、「寘天」は帝王の死を言う。伊藤富雄氏は「紙銭習俗考」で、これに基づいて、「紙銭の出現は資料的に明確ではないが、紙製造の普及と、佛教の東漸なくしては、考へられぬ。……中国に佛教が傳來して、茶毘（焚焼―筆者注）の教は流行したのであるが、瘞銭から焚銭に変わる為には、この宗教の力によつたに違ひない」と指摘している。

### 1、関与の証拠

紙銭が文献で始めて登場したのは唐代である。資料表を見ると、詩も小説も最初に仏教関係の書物に出てくる。詩の方は、詩僧の王梵志の詩である。資料表Ⅰに挙げてある詩は、三卷本『王梵志詩集』に収録されている。それは、主に武則天の時代までの初唐の作であると言われている。紙銭の語の見える三首は、いづれも、人が亡くなったら、家族から紙銭を送られるという内容である。

小説の方で、紙銭が最初に見えるのは、資料表Ⅱのよう、唐臨（600～659）の『冥報記』である。唐臨は仏教を信じ、冥界の因果応報の話を集めた。紙銭の登場した話は三話ある。先の「王壽」の話では、冥土の使者は銅銭ではなく、紙銭がほしいと言った。なぜ、紙銭がほしいのか。それには巻中にある「眭仁蒨」の話が参考となる。

眭仁蒨は鬼神の存在を確かめるために、鬼神を見る術を学んだ。ある日、道で一人の役人に声をかけられた。役人は、名を成景といい、もと西晋の別駕で、今は冥界の臨湖国の長史となり、友人を探していて眭仁蒨に会つたのだと言った。その後、成景は世間で起こることを事前に教えてくれた。隋の大業のはじめ頃、眭仁蒨は県令の家庭教師をしていた。その教え子に、成景を招待させた。宴会中、眭仁蒨は成景に宝物を贈ってあげてほしいと弟子に言った。どんなものかいいかを聞いたら、眭仁蒨は冥界

では現世のお金も通用するが、それより金色で染めた鉛や、紙で作った絹などの偽物の方がもつともよい、と答えた。それを贈ると、成景は非常に喜んで。(要約)

宋・道誠は『釈氏要覽』巻下の「紙錢綵絹」にこの話を引用して、「鬼所用、錢即紙錢也。若綵絹、亦紙爲之。銀即錫紙、金即黃塗之也。」(鬼の用ふる所、錢は即ち紙錢なり。綵絹の若きも、亦紙もて之を爲る。銀は即ち錫紙、金は即ち黄もて之に塗るなり)と記す。

また、紙錢の冥界への送り方について、巻中の「李山竜」(表Ⅱ・1番)では、冥土の使者が水辺で燃やして送るよう教えている。

そして、唐・道世(？く683)の『諸経要集』巻四に「俗中解祠之時、剪白紙錢、鬼得白錢用。剪黃紙錢、鬼得金錢用。問曰、『何以得知。』答曰、『冥報記。』」(俗中に解祠するの時、白紙の錢を剪らば、鬼は白錢を得て用ふ。黄紙の錢を剪らば、鬼は金錢を得て用ふ。問ひて曰く、「何を以て知るを得るか」と。答へて曰く、『冥報記』にありと。」とある。『冥報記』の話から、紙錢のことが学べるというのである。

唐・一行(683く727)の『七曜星辰別行法』は、二十八宿神に属する、疫病をもたらす三十人の幽鬼を祭る方法である。それらの幽鬼を祭るのに、紙錢を使うという。たとえば次のようである。

鬼名言破愛。令人患水痢不止。如不遇祭法、便成惡痢必至於死。當以紙錢一百貫・好酒・白脯祭之。(鬼の名は破愛と言ふ。人をして水痢を患ひて止まざらしむ。如し祭法に遇わずんば、便ち惡痢と成りて必ず死に至る。當に紙錢一百貫・好酒・白脯を以て之を祭るべし)。

唐・不空(705く774)の『焰羅王供行法次第』は閻羅王を祭る方法を記したものである。巻一に「国王・王子及百宦・宰相等人民、隨人應設供物。胡麻油・五穀・紙錢・幣帛・香藥等用之。……是法疫病・氣病一切病惱時宜修。」(国王・王子及び百宦・宰相等人民、人に隨ひて応に供物を設くべし。胡麻油・五穀・紙錢・幣帛・香藥等之を用ふ。……是の法は疫病・氣病一切の病惱の時に宜しく修むべし。)とある。

一行と不空は、共に玄宗に重視され、大きな影響力を持つ高僧である。彼らの書に、紙錢が登場するのは、當時の仏教が紙錢に關与していた有力な証拠になる。

宋・志磐『仏祖統紀』巻四十二に、天復三年(903)になくなった高僧の本寂禪師の事績を記している。

「日沿江岸拾蝦蟇以充食、暮臥白馬廟紙錢中。華嚴靜禪師夜入紙錢伺之。」(日に江岸に沿ひて蝦蟇を拾ひ以て食に充て、暮に白馬廟の紙錢の中に臥す。華嚴靜禪師夜紙錢に入りて之を伺ふ。)とある。晩唐の仏教の寺の

中には、人が隠れるほどの紙銭があつたことがわかる。

また、発掘情報にも仏教との関連を示す証拠がある。

1988年江西省德安県で南宋の墓から紙銭が発掘された。死者の財布の中に銅銭の形の紙銭があり、中の何枚かに「卍」が記されたという。<sup>29)</sup>

以上のことからみると、仏教が紙銭を扱い、積極的にそれを関与していたことは明白である。

しかし、利用していたといっても、紙銭は仏教の思想とは全く別のことである。『冥報記』の話でも、冥界の役人が紙銭を求めているだけで、仏教思想との関係はなにも記されていない。したがって、仏教が紙銭を使用し始めたとは言えない。

## 2、焼く理由について

紙銭は、「瘞銭」の変遷したものだといふのに、なぜ埋めるのではなく、燃やすのか。これは仏教の影響だといふ説がある。伊藤富雄氏は「幡柴と釋氏の焚焼習俗を統合して受け入れる余地を持っていたに違いない。」と仏教と関わりがあると指摘し、陸錫興氏は「吐魯番古墓紙明器研究」で、火葬と関連して、仏教のもたらした「新鮮事物」である可能性を示唆している。

祖先の幽鬼に対しては、葬儀と祭祀の二種類の扱いがある。「瘞銭」はただ葬儀の時だけのやりかたであり、紙銭は葬儀と祭祀と両方も利用される。その用途の違いを無視して、単にそのやり方を比べるという考えかたは問題である。葬儀の時に紙銭を埋めることはすでに

言及したので、ここでは祭祀の時に紙銭を燃やす理由を検討する。

唐・睿宗の時の安州刺史の杜鵬举のことを記した『杜鵬举伝』(表Ⅱ・6番)に、次のようにある。杜鵬举が県尉であつた時に冥界に連れて行かれ、冥界の裁判所の韋鼎という役人が彼を助けて、大金を冥界に送る方法について教える。

「焚時、願以物籍之、幸不著地。兼呼韋鼎、某即自使人受。」(焚く時、願はくは物を以て之を籍し、幸いに地に著かざらんことを。兼ねて韋鼎と呼べば、某即ち自ら人をして受けしむ。)

この話では、燃やすときに紙銭を直接に地面に置くのではなく、下に何かを敷かなければならないという。『博異記』の「鄭潔」(表Ⅱ・35番)では、紙銭の下にものを敷くことについて、もう少し詳しく記している。冥土の使者が次のようにいう。

每燒錢財、如明且欲送錢與某神祇。即先燒三十二張紙錢、以求五道、其神祇到必獲矣。如尋常燒香、多不達。如是春秋祭祀者、即不假告報也。其燒時、輒不得就地。須以柴或草薦之。從一頭以火爇、不得攪碎。其錢即不破碎、一一可達也。(錢財を焼く毎に、明且錢を送りて某神祇に与へんと欲するが如く

せよ。即ち先に三十二張の紙銭を焼き、以て五道に求めば、其の神祇到りて必ず獲る。尋常の香を焼くが如くせば、達せざること多し。如し是れ春秋の祭祀ならば、即ち告報を假らざるなり。其の焼く時は、輒ち地に就くを得ざれ。須らく柴或いは草を以て之を薦ぐべし。一頭より火を以て蒸し、攪碎するを得ざれ。其の銭即ち破碎せず、一一達するべきなり。」

「春秋祭祀」とは春と秋の時に祖先を祭ることである。ここで使者が神様と祖先に紙銭を送る方法を教える。神様の場合は前もって「五道」に報告しなければならぬが祖先の場合は報告せずに燃やす。燃やす方法は下に柴や草を敷かなければならないという。

神様を祭祀のやりかたについて、『札記』巻四十六「祭法」に「燔柴於泰壇、祭天也。瘞埋於泰折、祭地也。」（柴を泰壇に燔くは、天を祭るなり。泰折に瘞埋するは、地を祭るなり）とあり、孔穎達の疏に「燔柴於泰壇者、謂積薪於壇上、而取玉及牲置柴上燔之、使氣達於天也。」（柴を泰壇に燔くとは、薪を壇上に積めて、玉及び牲を取りて柴の上に置きて之を燔き、氣をして天に達せしむるを謂ふなり。）とある。神を祭る時は柴の上に、玉・生け贄などの贈り物を置いて燃やし、氣を天に届かせるのだという。

では、祖先を祭るときはどうするのか。『旧唐書』巻二十三「礼儀志」に「祭祀之禮、周人尚臭。祭天則燔柴、

祭地則瘞血、宗廟則燔蕭灌鬯。皆貴氣・臭、同以降神。」（祭祀の礼、周人は臭を尚ぶ。天を祭るには則ち柴を燔き、地を祭るには則ち血を瘞め、宗廟には則ち蕭を燔きて鬯を灌ぐ。皆氣・臭を貴び、同に以て神を降す。）とある。煙と臭氣を届けるのは神に対する場合と同様である。つまり、柴や草の上に、幣・帛・生け贄などを置いて燃やすことは昔からの神や祖先を祭る方法としていた。紙銭が鬼神への贈り物として祭祀に登場する時には、そのやり方はすでに決まっていたのである。したがって、祭祀の時に紙銭を燃やすのは不思議なことではなく、古来の儀式から派生したものであり、仏教の「焚燒習慣」や「火葬」に関連づける必要はない。

紙銭はもともと柴や草より燃えやすいものだから、後に下に柴などを敷くという手間を省いて、直接に燃やすようになったのだろう。ただ下に柴などを敷く段取りを省くことは、鬼神に対して、失礼な行動になる。『博異記』鄭潔の話で、幽鬼がわざわざ正しい礼儀を教えたのはそのためだろう。

小説には、紙銭を燃やすと冥界に届いたという記述がよくある。例えば、『河東記』「辛祭」（表Ⅱ・32番）に次のように記す。

司門令史の辛祭が冥土の使者に連れていかれた。

使者はお金を出せば、放してあげると言ったが、辛祭は貧しくてお金を調達できないと答える。すると、

使者はそれは紙銭だと説明した。そこで辛察は家族に告げて紙銭を燃やしてもらった。(要約)

その場面に、「察見紙錢燒訖、皆化爲銅錢。」(察紙錢燒け訖り、皆化して銅錢と爲るを見る。)と記す。

実は、燃やしてものが冥界に届くという話は、すでに南齊・祖冲之『述異記』に見える。

夏侯祖欣爲兖州刺史、喪於官。沈僧榮代之。祖欣見形詣僧榮。牀上有一織成寶飾絡帶。夏侯曰、「此帶殊好。豈能見與之。」沈曰、「甚善。」夏侯曰、「卿直許終不見與。必以爲施、可命焚與。」沈對前燒、視此帶已在夏腰矣。(夏侯祖欣兖州刺史と爲り、官に喪す。沈僧榮之に代はる。祖欣形を見して僧榮に詣る。牀の上に一織成の宝飾の絡帶有り。夏侯曰く、「此の帶殊に好し。豈に能く之を与へらるるか」と。沈曰く、「甚だ善し」と。夏侯曰く、「卿直ちに許すも終に聞られず。必ず以て施さんと爲さば、命じて焚きて与へしむべし」と。沈前に対して焼けば、此の帶已に夏の腰に在るを視るなり。)

この話では、帯を燃やしたとたんに、幽鬼のところへ届いている。南朝・宋の時代には、物を燃やせばて確実に冥界に届くという発想があったことがわかる。

以上のことから考えると、仏教が紙銭を利用したのは、

布教を目的として、中国古来の礼儀、民間の風習をとりこんでいく過程で生じたものだと考えるのが妥当であろう。

## (二) 道教・巫

巫術は中国の土俗的な宗教である。道教と仏教以前は、鬼神と現世との間の交流に橋をかける、欠かせない存在であった。道教は巫術の土壌で生まれ、のちに巫術を取り込んでいた。両者の区別は困難なので、ここでは道教と巫を合わせて論じる。

『大正新修大藏經』に所収一行の『七曜星辰別行法』には、日本の林常房の誌が付載してあり、

是此祭法非紙錢・酒脯、則不能也。是道家之所爲。又禁忌僧尼之入。豈爲佛家之說。(是れ此の祭法は紙錢・酒脯に非ずんば、則ち能はざるなり。是れ道家の爲す所なり。又僧尼の入るを禁忌す。豈に仏家の説たらんや。)

と、道教が紙錢と酒で神を祭ることが指摘されている。

旧来の説には、紙錢と関わった人物として、殷長史や東昏侯、李淳風及び王瓊が挙げられていた。

東晋から隋まで、殷長史と称し得る人物は十二人あり、特定できないが、いずれも、陳郡長平(河南西華県東北)にある、道教を信じた一族であった。中でも有名なのは殷仲堪(?~三九九)である。『晋書』卷八十四の本伝に、



「能清言、善屬文。每云三日不讀『道德論』、便覺舌本間強。……仲堪少奉天師道、又精心事神。不吝財賄、而怠行仁義、畜於周急、及玄來攻、猶勤請禱。」（清言を能くし、文を属るを善くす。毎に云ふ三日『道德論』を讀まざれば、便ち舌本の間強なるを覺ゆと。……仲堪少きより天師道を奉じ、又精心にして神に事ふ。財賄を吝まらずして、仁義を行ふことを怠り、急を周くるを畜む。玄來たりて攻むるに及び、猶ほ勤めて請禱す。）とある。

東昏侯は南齊の廢帝の蕭宝卷（四八三〜五〇一）のことである。『南史』卷五「廢帝東昏侯伝」に「又偏信蔣侯神、迎來入宮、晝夜祈禱。……又曲信小祠、日有十數。師巫魔媼、迎送紛紜。」（又偏へに蔣侯神を信じ、迎へ來たりて宮に入れ、晝夜に祈禱す。……又曲にて小祠を信じ、日に十數有り。師巫魔媼、迎送すること紛紜たり。）とある。

殷仲堪は天師道を信じ、東昏侯はよく巫を遣わして蔣侯神を祭つていた。いづれも道教と巫女と深い關係をもつていたことがわかる。

李淳風（602〜670）は初唐の太史令である。『旧唐書』卷七十九の伝に「父播、隋高唐尉。以秩卑不得志、棄官而爲道士。頗有文學、自號黃冠子。注『老子』、撰『方志圖』。文集十卷、並行於代。淳風幼俊爽、博涉群書、尤明天文・曆算・陰陽之學。」（父は播、隋の高唐の尉なり。秩卑く志を得ざるを以て、官を棄てて道士

と爲る。頗る文學有り、自ら黃冠子と号す。『老子』に注し、『方志圖』を撰す。文集十卷あり、並びに代に行ふ。淳風幼くして俊爽なり、博く群書を涉り、尤も天文・曆算・陰陽の學を明らかにす。）とある。

李淳風と紙錢の關係は、『冊府元龜』卷一百四十四帝王部「弭災第二」に見える。

末帝清泰元年……司天監靈臺郎李德舟霖雨爲災、獻唐初太史令李淳風『祈晴法』。天皇大帝・北極北斗壽星・九曜二十八宿・天地水三官・五嶽神、又有陪位神五嶽判官・五道將軍・風伯雨師・名山大川。醮法用紙錢・馳馬有差。（末帝の清泰元年（934）……司天監靈臺郎の李德舟霖雨を以て災と爲し、唐初の太史令李淳風の『祈晴法』を獻ず。天皇大帝・北極北斗壽星・九曜二十八宿・天地水三官・五岳神あり、又陪位神の五岳判官・五道將軍・風伯雨師・名山大川有り。醮る法は紙錢・馳馬を用ふるに差有り。）

李淳風は紙錢を利用して神を祭つて災害を払ったことわかる。

王瓊（？〜768）については、『旧唐書』卷一百三十の本伝に「每行祠禱、或焚紙錢。禱祈福祐、近於巫覡。……太卜云、『崇在山川。』瓊乃遣女巫分行天下、祈祭名山大川。」（毎に祠禱を行ひ、或いは紙錢を焚く。福

祐を禱祈すること、巫覡に近し。……太卜云ふ、「崇は山川に在り」と。璵乃ち女巫を遣わして分けて天下を行き、名山大川を祈祭せしむ。」とある。王璵はすでに民間で使われていた紙銭を初めて国の祭祀に用い、巫女を使って行わせている。

また、張籍「華山廟」（表Ⅰ・6番）には、「金天廟下西京道、巫女紛紛走似煙。手把紙錢迎過客、遣求恩福到神前。」（金天廟の下、西京の道、巫女紛紛として走ること煙に似る。手に紙銭を把りて過客を迎へ、遣はして恩福を求めて神の前に到らしむ。）と紙銭を使う巫女が詠われている。これは、巫女が紙銭の使用に関わっていたことを示している。

道教の典籍の中からも紙銭の記事が見つかった。唐末の道士杜光庭（850～933）の『道教靈驗記』巻十五「邛州成都奏銭事」に次のような話がある。

罪を追究された息子を助けるために、父の幽鬼が妻にそのやり方を教えた。それは自分の元の上司に上訴書を出し、北帝の廟に二百の紙銭を供して祭れというものであった。妻が言われたとおりにすると、果たして、その上司が息子を助けた。（要約）

また宋・張君房『雲笈七籤』巻二十五「北極七元紫庭秘訣」には、神を呼び寄せる祭り方が記載されている。

醮時皆須沐浴齋潔。以燈列位每星下、用卓子一隻、上安供養物。各以茅香水洗過、并洒掃庭室。乃祀之位北。立一紙錢標、則候標上錢動。真乃降矣。（醮まじする時は皆須からく沐浴齋潔すべし。灯を以て位を每星の下に列ね、卓子一隻を用ひ、上に供養物を安んず。各おの茅香の水を以て洗過し、並びに庭室を洒掃す。乃ち之を位の北に祀る。一紙銭の標を立て、則ち標上の銭の動くを候ふ。真乃ち降るなり）。

以上の資料からすると、道教・巫は少なくとも初唐の頃から紙銭を利用していたことがわかる。特に、王璵が、紙銭を国家の祭祀に使用したことは、大きな意味を持つ。それによって祭祀に紙銭を使う風習が大いに加速されたと思われる。

### 三 唐代小説における紙銭

紙銭がいつ、誰によって行われ始めたのかは、まだ確定できないが、唐代に入ると風習として定着したのは確実である。それは小説の中で、人々の想像を膨らませる格好の材料となった。以下、唐代小説において紙銭がどのように使われているかを検討してみたい。

#### （一）紙銭を求める者

##### 1、冥土の使者

冥土の使者は現世に現れ、人を冥界に連れて行く役人である。かれらは現世の役人と同じく、賄賂を求めて手

加減を加える。六朝小説にも見られる。例えば、『述異記』「費慶伯」（『太平広記』卷第三百二十六）に次のような話がある。

南朝宋の役人の費慶伯が休みで自家に帰った。三人の役人がやってきて、役所からのお呼び出しだと伝えた。おかしいと思って聞いてみたら、冥界の使者が連れに来たことがわかった。費慶伯がぬかずいて助けを請うと、使者が、酒食のもてなしをするなら、他の人と代えてもいいと言う。のちに費慶伯が約束を破つてそのことを妻に話してしまつたので、使者たちは刑罰を受け、費慶伯もそのまま死んだ。

（要約）

六朝小説には、このように登場する冥土の使者が食べ物や金品など実物を求める話が多くある。

これが、唐代になると、賄賂として紙銭を要求するのが定番となっている。表Ⅱの話の冥土の使者が登場する話では、ほとんどが紙銭を要求する。

## 2、地鬼神・役所

役人だけでなく、冥界の神様と役所も紙銭を求める。

『広異記』「裴齡」（表Ⅱ・10番）に冥土の使者が紙銭の作り方を教える話がある。

世作錢於都市。其錢多爲地府所收。君可呼鑿錢人、

於家中密室作之。畢、可以袋盛。當於水際焚之、我必得也。受錢之時、若橫風動灰、即是我得。若有風颺灰、即爲地府及地鬼神所受。（世に錢を都市に作る。其の錢は多く地府の收むる所と爲る。君錢を鑿つ人を呼び、家中の密室に於いて之を作るべし。畢れば、袋を以て盛るべし。水の際に当りて之を焚かば、我必ず得るなり。錢を受くるの時、若し横風灰を動かさば、即ち是れ我得るなり。若し風有りて灰を颺げば、即ち地府及び地鬼神の受くる所と爲る。）

この話は、県尉の裴齡が冥界に連れて行かれて、審判を受けたあと、冥土の使者に紙銭を要求されたものである。内容は『冥報記』の「王璿」に似ているが、冥界の役所まで紙銭を求めるのは、新鮮である。

## 3、死者

もともと紙銭は実物の銅銭のかわりに親族に送るものだから、なくなつた親族がそれを手にするのが当たり前である。『広異記』「費子玉」（表Ⅱ・14番）に、費子玉が冥界に連れていかれ、先になくなつた三番目の妻からお金をの返還を求められる話がある。

妻云、「用我銅錢。今還紙錢耶。」子玉云、「夫用婦錢、義無還理。」妻無以應、遲廻各去也。（妻云ふ、「我が銅錢を用ふ。今紙錢を還さんか」と。子

玉云ふ、「夫婦の錢を用ふるは、義として還す理無し」と。妻以て応ずる無く、遲廻して各おの去るなり。」

『金剛經』をとなえたおかげで、地蔵に助けられた費子玉が、その妻の幽鬼から紙錢を要求されている。

このように、冥界の役所を始め、冥界にいるあらゆるものが紙錢を求めていることがわかる。簡単に手に入り、使いやすかつたからである。

#### （二）様々な使い道

銅錢は埋葬の時に一度だけ埋められる。紙錢の場合は埋葬と祭祀と両方にも用いられる。しかも、相手は祖先だけでなく、冥土の使者やほかの幽鬼もある。必要の時、よくその場で燃やしておく。即ち空間と時間の制限がなく、いつでもどこでも簡単に送ることが可能である。これによって、冥界に送る目的は多様になり、その量もずいぶん増えてきた。それに応じて、大量のお金が入った冥界では、そのお金をどう使うのか、という問題が生じてくる。これがまた人々の想像を膨らませている。

#### 1、冥界での使い方

『玉堂閑話』「許生」（表Ⅱ・45番）の話には、誤って冥界に連れて行かれた門客の許生が、主人の妻の幽鬼に会った。その妻が、「飢寒尤甚。希君濟以資緡數千貫。」（飢寒尤も甚だし。君濟ふに緡數千貫を資するを以てせんことを希ふ。）と頼んだ。紙錢は、死後の生活

に欠かせないものであった。

『通幽録』「盧瑣」（表Ⅱ・23番）に、盧瑣の女中の小金が幽鬼に祟られた話がある。

盧生以古鏡照之。小金遂泣言、「朱十二母在鹽官縣、若得一頓餽餽及顧船錢、則不復來。」盧生如言、遂訣別而去。方欲焚錢財之時、已見婦人背上負錢。焚畢而去。小金遂釋然。」（盧生古鏡を以て之を照らす。小金遂に泣きて言ふ、「朱十二の母塩官縣に在り、若し一頓の餽餽及び船を顧ふ錢を得ば、則ち復た來たらず」と。盧生言の如くせば、遂に訣別して去る。方に錢財を焚かんと欲するの時、已に婦人の背の上に錢を負ふを見る。焚き畢りて去る。小金遂に釈然たり。）」

長い間に小金に崇っていた朱十二という女鬼が、最後に行った要求である。もらった紙錢を船の運賃に使うという。

その他、『河東記』「王錡」（表Ⅱ・30番）では、紙錢を兵隊を雇用するのに使っている。

#### 2、現世にも使う

冥界に送った紙錢は、冥界で使うことは当たり前である。しかし、冥界に止まらず、現世でも使われる。もちろん、使うのは現世の人ではなく、幽鬼である。

『纂異録』「許生」（表Ⅱ・39番）に、次のような

話がある。

落第した許生は故郷に帰る途中、多くの召使いを率いた白衣の老人に出会った。許生はその詠んだ詩から、老人が幽鬼であることがわかった。ともに行くうちに、日が暮れた。老人は、これから友達に会いに行くからと言って、別れを告げたが、許生は密かにその後を追った。そして、荒野に四人の文人の幽鬼が酒を飲んで詩を交わす光景を目にした。幽鬼が去った後、許生は旅館に行った。着いたときは、もうすぐ夜明けになるところであった。店員のお婆さんに理由を聞かれると、許生は見たことをすべて話した。すると、お婆さんが、「昨夜、馬に乗って壺を持った人が、ここで酒を買った。もしかしたら、それは幽鬼じゃないか。」と言ひ、錢箱を開けてみたら、中はすべて紙錢であった。(要約)

なぜ幽鬼は紙錢で酒を買うのか。紙錢が変化するという特徴を持っているからである。紙錢は冥界に届くと銅錢に変化する。人間の目でみれば、しばらく銅錢のままであるが、後に紙錢の形に戻る。紙錢の変化する性質がなければ、このような話は成り立たない。

紙錢は冥界で使うものである。幽鬼はこれを知っているが、時に間違つて現世の人に渡してしまうこともある。『宣室志』『淮南軍卒』(表Ⅱ・40番)の次の話がそ

れである。淮南の兵士の張某が手紙を長安まで届けるのを任された。旅館で寝ている間に、金天王のところに来て行かれ、王から蜀にいる娘婿に手紙を届けるよう頼まれた。天王は謝礼として錢一万を贈った。

趙即以錢貯懷中、輒無所礙、亦不覺其重也。行未數里、探衣中、皆紙錢耳。即棄道傍。俄有追者至。以數千錢遺之曰、「向吾誤以陰道所用錢賜君。固無所用。今別賜此矣。」(趙即ち錢を以て懷中に貯ふるに、輒ち礙ぐる所無く、亦其の重きを覺えざるなり。行くこと未だ數里ならず、衣中を探れば、皆紙錢なるのみ。即ち道傍に棄つ。俄かに追ふ者有りて至る。數千錢を以て之に遺りて曰く、「向に吾誤まりて陰道に用ふる所の錢を以て君に賜ふ。固より用ふる所無し。今別に此を賜ふなり」と。)

この話では幽鬼は紙錢が現世で使えないことがわかっているが、偶然にあやまったのではなく、紙錢の変化できる性質を知った上で、わざと利用する場合もある。『広異記』「楊元英」(表Ⅱ・11番)に、則天の時の太常卿の楊元英が無くなった二十年後のことを記されている。息子が鉄物屋で父親の墓に埋めた劍を見かけた。尋ねていると、役人から修理を頼まれたという。そこで息子はほかの兄弟を集めて、父親が劍を取りに来るのを待っていた。果たして楊元英がやって来た。次は息子たち

と別れるときの話である。

謂子曰、「我有公事、不獲久住。明日、汝等可再至此。當取少資、助汝辛苦。」子如期至、元英亦至。得三百千。誠之云、「數日須用盡。」言訖訣去。：數日、市具都盡。三日後、市人皆得紙錢。(子に謂ひて曰く、「我公事有り、久しく住むるを獲ず。明日、汝等再たび此に至るべし。当に少資を取り、汝の辛苦を助くべし」と。子期の如くして至り、元英亦至る。三百千を得。之を誡めて云ふ、「數日にして須からく用ひ尽くすべし」と。言ひ訖りて訣れ去る。：：數日にして、具を市ひて都て尽くす。三日の後、市人皆紙錢を得。)

この話では、楊元英の幽鬼が息子たちに、錢を數日の間に全部使い切れと戒めた。一旦は現世のお金と同じ形をしている紙錢が、もとの姿に戻ることを知っているからである。紙錢の変化する性質を利用して現世に使うという考え方は、全く巧みな想像力と言える。

紙錢を使って現世でもものを買えるなら、現世のものほほしい幽鬼にとつても、正に好都合である。『広異記』「韋栗」(表Ⅱ・13番)に次のような話がある。

韋栗という県丞に若い娘がいた。赴任の途中、揚州で、娘は高級な鏡をほしがったが、韋栗はお金に

余裕がないので買わなかった。しかし一年後に娘が病死してしまう。任期が終わり、娘の柩を船に乗せて帰郷する途中、また揚州に着いた。一人の少女が錢をもって、鏡を買い求め、鏡を売る少年が少女の美しさに惚れて、やすい値段で鏡を売り、密かに少女の後を追わせた。しばらくすると、代金の錢は紙錢になった。少年は少女の入った韋栗の船にお金をもらいに来た。韋栗の妻は少女の様子を聞き、自分の娘ではないかと思ひ、泣き出した。船中を探してみたら、母の切った紙錢の一部がなくなっていて、それがちょうど少年の得た分と同じだとわかった。少女の棺を開けてみると、果たして鏡が中にあつた。その場にいる人は皆感動した。少年は代金のことを追求せずに、またお金を出して少女を祭った。(要約)

紙錢の変化する性質のおかげで、こういう感動的な話まで作られている。

安さと便利さを持つ紙錢が、社会に認められ、風習になると、その送る相手は祖先から、冥土の役所や使者などまで広がった。そして冥界での買い物に使えるまでに想像が膨らんだ。また、銅錢に変化できる性質は、幽鬼たちが紙錢を持って現世で買い物をする話までも生み出した。

終わりに

本論では唐代小説に出てくる紙銭の由来、仏教・道教との関連を検証した。紙銭発生の時期はまだなぞのままであるが、それは中国古来の葬儀・祭祀の伝統の上に成立したものであることがわかった。それを仏教・道教が利用し広めたのである。

また、唐代に風習となった紙銭は小説に新しい材料を提供し、人々の感動を呼ぶ小説を作り出ししていることもわかった。

今後、紙銭以外の鬼神にかかわる風習の検討を重ね、小説への影響関係を追求してみたい。

注

- (1) 『支那学研究』1951年第七期。
- (2) 『太白』半月刊1935年、第二卷第十期。
- (3) 『中国造紙』1996年、第二期。
- (4) 『西域研究』2006年、第三期。
- (5) ※の印が付いているものは「紙銭」という二文字が記されていないが、「紙銭」を使っただと思われる作品である。
- (6) 現存の『冥報記』に収録されていないが、『法苑珠林』巻六十四・『太平広記』巻一百三十二作出『冥報記』。
- (7) 『太平広記』には「出處士蕭時和作傳」とあるが、今、李劍国の『唐五代志怪伝奇叙録』(1993年、南開大学出版社)に『杜鵬拳伝』とするのに従う。
- (8) 明抄本作『異聞録』。

(9) 明抄本・陳校本作『靈怪集』。

(10) 明抄本作『広異記』。

(11) 新疆維吾爾自治区博物館「新疆吐魯番阿斯塔那北区墓葬発掘簡報」(『文物』1960年、第六期)。

(12) 新疆維吾爾自治区博物館「吐魯番阿斯塔那哈拉和卓古墓群発掘簡報」(『文物』1973年、第十期)。

(13) 『太平広記』巻三二三鬼部八。

(14) 魯迅「六朝小説和唐代傳奇有怎樣的區別」(『魯迅全集』第六卷)に「那時還相信神仙和鬼神、并不因爲虛造、所以所記雖有非凡和幽明之殊、却都是史的一類。」とある。

(15) 袁駿の『楓窓小牘』巻下にその内容があり、第三節(1ページ)に挙げている。

(16) 『芸文類聚』巻六十六。

(17) 『太平広記』巻三二六鬼部十一。

(18) 安徽考古研究所「安徽長豊戦国晚期楚墓」(『考古』1994年、第二期)。

(19) 陝西省考古研究所漢陵考古隊「漢景帝陽陵南区從葬坑發掘第一号簡報」(『文物』1992年、第四期)。

(20) 陸錫興「元明以来紙銭的研究」(『南方文物』2008年、第一期)。

(21) 『後漢書』巻七十四上「袁紹伝」に「又梁孝王、先帝母弟、墳陵尊顯。松柏桑梓、猶宜恭肅。操率將吏士、親臨發掘。破棺裸尸、掠取金寶。至令聖朝流涕、士民傷懷。又署發丘中郎將・摸金校尉。所過毀突、無骸不露。」(又梁孝王は、先帝の母弟、墳陵尊顯なり。松柏桑梓、猶ほ宜しく恭肅す

べし。操、吏士を率將し、親ら臨みて発掘す。棺を破りて尸を裸むきぎ、金宝を掠取す。聖朝をして流涕し、士民をして傷懐せしむるに至る。又発丘中郎將・摸金校尉を署す。過ぐる所毀突し、骸の露されざる無し。」とある。

(22) 『三国志』卷一「魏書・武帝紀」。

(23) 『三国志』卷二「魏書・文帝紀」。

(24) 『晋書』卷三十二「成恭杜皇后伝」に「至是而后崩。帝下詔曰、『吉凶典儀、誠宜備設。然豐約之度、亦當隨時。況重壤之下、而崇飾無用邪。今山陵之事、一從節儉、陵中唯潔掃而已。不得施塗車芻靈。』」(是に至りて后崩ず。帝詔を下して曰く、「吉凶典儀、誠に宜しく備そなへに設くべし。然れども豐約の度、亦当に時に随ふべし。況んや重壤の下にして、飾を崇ぶこと用無きをや。今山陵の事、一に節儉に従ひ、陵中唯だ潔掃するのみ。塗車芻靈を施すを得ず」と。)とある。

(25) 『三国志』卷二「魏書・文帝紀」に「喪乱以来、漢氏諸陵無不發掘。至乃燒取玉匣金縷、骸骨并盡。是焚如之刑、豈不重痛哉。禍由平厚葬封樹。」(喪乱以来、漢氏の諸陵發掘せられざる無し。乃ち燒きて玉匣金縷を取り、骸骨並び

に尽くるに至る。是れ焚如の刑のごとく、豈に重く痛まざらんや。禍は厚葬封樹に由るなり。)とある。

(26) 『民俗文学研究』2006年、第三期。

(27) 項楚『王梵志詩校注』上海古籍出版社1991年。17ページ参考。

(28) この話には、「紙錢」という二文字が出ていないため表IIに挙げていない。

(29) 江西省文物考古研究所・德安県博物館「江西德安南宋周氏墓清理簡報」(『文物』1990年第九期)。

(30) 『太平御覧』卷六百九十六「服章部十三」・『北堂書鈔』卷百二十九「絡帶三十」作『述異記』。『太平広記』卷三百二十四「鬼九」作『古今五行記』。

(31) 『周礼』「春官宗伯」に「司巫中士二人、府一人、史一人、胥一人、徒十人、男巫無數、女巫無數。」とある。

(32) 傅勤家『中国道教史』团结出版社2005年。195ページに「因方士之各種方術、其后悉包容于道教、故后世道教衰集之書、駁雜乃不可倫。」とある。